神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

# Morphological norms of church Slavic verbs in Michajlo Luchkaj's "grammatica Slavo-Ruthena"



| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2000-09-30 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1445 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# ミハイロ・ルチカイ
# 『スラブ語・ルシン語文法』における動詞規範
（特に法の記述をめぐって）*

岡　本　崇　男

## 1. はじめに

16世紀末から17世紀初頭にかけてポーランド・リトアニア連合王国の中の東スラブ語使用地域（現在のリトアニアおよび南西ルシ，すなわちベラルーシとウクライナの大部分）で教会スラブ語の文法書が成立したことは，この地域に土着の東スラブ語に基礎を持った書き言葉の形成を促しただけでなく，モスクワを中心とした北東ルシ（モスクワ公国）においても文法書の必要性を意識させたという点で，東スラブ語の発達史における重要な契機であった。筆者はこれらの文法書に記録されている教会スラブ語規範のうち，特に動詞の過去時制の形式にかんする当時の文法家の見解を比較検討するとともに［文献10］，書き手がどのような規範意識を持って実際に文章を書いていたかについても年代記テキストを材料として調査した［文献9，11］。この結果，当時の文法書は必ずしも現実に生産されたテキストの中に定着した言語形式を取捨選択して集成したものではなく，むしろ文法家が理想とする形式を規範とし，これらを教育の場で利用することで自らの規範を普及することを目的に編纂された可能性が強い。そして，ここでいう理想的な形式が常に古い形式に求められるとは限っておらず，場合によっては人工的な形式が捏造さ

*本論文は平成12年度文部省科学費補助金による研究成果の一つである。（基盤研究（C)(2)，研究課題名「リトアニア・ベラルーシ年代記テキストにみられる言語規範意識の分析」，課題番号11610546）

れることさえあるという中間的な結論が得られた。

本論文で扱うミハイロ・ルチカイの『スラブ語・ルシン語文法』が著されたのは，同一地域であるものの筆者が今まで検討の対象としてきた時代から更に一世紀以上下り，スラブ世界においてもロシア語を含めて国家あるいは民族の標準文章語としての現代語が文法記述の主たる対象となっていた19世紀前半のことである。そして，「スラブ語」すなわち教会スラブ語はもはや標準文章語としてではなく比較言語学の研究対象として19世紀後半から本格的に文法記述が行われるようになる。そこで，本論文ではルチカイの文法書における教会スラブ語動詞，なかでも法の規範記述を検討し，南西ルシにおける文法書記述の伝統の変化を視野に入れながら，記述の特徴をあきらかにしてみたい。

## 2. 『スラブ語・ルシン語文法』成立の経緯

ミハイロ・ルチカイの『スラブ語・ルシン語文法』[1]は1830年にハンガリーのブダ（現在のブタペシュト）で出版された。これは表題の示す通り，教会スラブ語と「ルシン語」(lingua Rhutenica）の対照文法という体裁を取っているのであるが，当時オーストリア領であったカルパチア山脈西南部に居住していた東スラブ人の方言の最初の文法書であり，同時にオーストリアで出版された最初の教会スラブ語文法でもある。

ミハイロ・ルチカイの経歴は［資料３］に収められたP.M.リザネチによる解説［文献５］にまとめられている。これを要約すると以下のようになる。

ミハイロ・ルチカイ（Михайло Михйлович Поп-Лучкай）は1789年11月19日にカルパチア山脈西南部のムカチェヴォ地区[2]のヴェリキ・ルチキ（Великi Лучки）村で補祭ミハイロ・ポプの長男として生まれた。生家のある村とウジゴロドの小学校で初等教育を受け，1805年にウジゴロドの実践ギムナジウム[3]に進み，そこで二年間学んでいる。その後ヴェリキ･ヴァロディナ（現在のオラデアールーマニア共和国）のギムナジウムに移って，1812年

にそこを修了した。

1812年から1816年の間，ミハイロはウィーンの王立神学校で寄宿生活を送り，ヨセフ・ドブロフスキやイェルネイ・コピタルの教えを受けている。ルチカイがこれらの学者，特にドブロフスキから大きな影響を受けたことは疑いもなく，この時期に文献学者としても人間的にも確立したようである。また，本来の姓であるポプを自分の生まれた村の名前に因んだルチカイに変えたのもこの頃であったといわれている。

神学校を修了後，ルチカイはハンガリーに戻り聖職者として活動する。先ず，1816年の9月から1817年の終りまで，生まれ故郷であるヴェリキ・ルチキ村で司祭の任にあり，その後ムカチェヴォ司教管区の司教補佐を勤め文書作成に携わる。1818年9月から1827年8月まで同司教管区の図書係兼文書保管係。そして，1827年からムカチェヴォに隣接する地区であるウジゴロドの司祭兼司教代理となり，ここで学校の設立に尽力する。1828年にはブダで「ルシ語検閲官」に就任した。1829年7月から1830年10月までルチカイはブルボン家のシャルル・ルイ大公の招きに応じてイタリアのルッカに滞在し，ここで文筆活動を行なう。そして，『スラブ語・ルシン語文法』もこの時期に書かれた。これ以降ルチカイはルシン語による学校教育の普及に傾倒するのだが，1840年以来健康を害し1843年に没した［文献 5：5-8］。

こうした経緯から，ルチカイが『スラブ語・ルシン語』を執筆した目的は，自分達の母語であるルシン語[4]に文法を持った書き言葉を与え，それを学校教育を通じて普及させるためであったことに疑問の余地はない。そして，ウィーン時代に近代スラブ語研究の創始者ですでに近代チェコ語文法（1809年）を著していたドブロフスキや最初のスロヴェニア語文法（1808年）を出版したコピタルに接したことが，ルチカイに文法書を執筆させた大きな刺激になっていることは想像に難くない。特にドブロフスキへの傾倒はルチカイの文法書の本文中に幾度も自分の師の名前が現れることからも伺える。このため，この文法書はドブロフスキの著作の要約に過ぎないという評価さえある程である［文献 3：33］。

### 3. 動詞の規範記述について

ルチカイは「動詞について」(De verbis. Ѡ СЛОВѢХ НЛН ГЛАГОЛАХ) という表題で始まる動詞規範の記述に42ページ (§§35-47) を費やしている。本文176ページのうち，154ページ以降はルシン語の選文集 (Specimina styli Ruthenici) に割り当てられているので，動詞の説明に割かれたページ数が最も多い。

先ず彼は動詞の三つの相 (能動，中動，受動) を提示する。ただし，能動 ((verba) Activa) と中動 (Neutra) の区別については何も述べず，ただ例としてВЕДꙋ「導く (duco)」，ВЕЗꙋ「運ぶ (veho)」，МѢЮ「洗う (lavo)」，СТОЮ「立つ (sto)」，СПЛЮ「眠る (dormio)」を挙げている。また，受動相 (Passiva) の動詞については，ВЕДОМ ЄСМЬ，ВЕДꙋСѦ「導かれる(ducor)」，ВЕЗОМ ЄСМЬ，ВЕЗꙋСѦ「運ばれる (vehor)」のように受動現在分詞とБЫТН (英語の be 動詞に相当) の現在形で作られる合成述語と助辞СѦを付加して作られる再帰形を併記している (§35, p.76)。

次に，ルチカイは動詞を意味の観点から六種類に分類し，形式との関係も論じている (§35, pp.76-77)。それは以下のような内容となる。

(1) 単純な意味を持ち一つの動作を表す動詞 (verba simplicis significationis, unum actum designantia)—通常語根 (radix) にꙋ，Ю のみを加え，不定詞では殆どの場合 ТН のみを加える。НЕС-ꙋ/НЕС-ТН, ВЕС-ТН, Дꙋ-Ю/Дꙋ-ТН.

(2) 行為が繰り返されたり継続する多回動詞 (Iterativa) —不定形が殆どの場合-АТН, -ѦТН, -ОВАТН で終る。БЫВАТН, СТОѦТН, КꙋПОВАТН.

(3) 目前の行為や知覚の意味を持つ始動動詞 (Inchoativa, actionis praesentis ac sensus)—現在形は-ѢЮ，不定形は-ѢТНで終る。РАЗꙋМѢ Ю/РАЗꙋМѢТН, СТАРѢЮ/СТАРѢТН.

(4) 未来の意味および行為を表す始動動詞 (Inchoativa, sensus et actio-

nis futurae)—現在形が-NȣȣTH で終る。ΔȣNȣ/ΔȣNȣTH, ѲYCNȣ/ѲYCNȣTH.

(5) 作為動詞 (Factitica)—不定詞が HTH となる。NѲCHTH, BѲЗHTH, ΔΔBHTH, ΛѲMHTH.

(6) 再帰動詞 (Reflexa)—CA で終る。ただし，受動相の動詞と違って，他人の行為が除外され，行為者にのみ動作が反映される中動相の動詞。БѲЮCA, TрAcȣCA.

### 3.1 語幹の決定

§36 以降は動詞の形式的な分類とそれぞれの下位タイプにかんする説明に当てられている。そして，この作業の基礎として動詞の語幹形式の決定が行われる (§36, pp.77-79)。

語幹形式を決定するに際して，ルチカイは直接法一人称単数現在形に現れる語根から語幹を判断する伝統的な古典文法の方法を，人称語尾ȣまたはЮを取り除いたところで常に真の形式がわかるわけではないという理由で否定している。また，未完了過去 (imperfectum) 三人称単数形を語幹とする方法についても，実際に余計な音が付加されることがあるということでやはり拒否している。[5] そして，最終的にルチカイが採用した語幹形式決定の方法は，不定詞と直説法一人称現在形を基準にしたもので，詳細は以下の通りである。

(1) 不定形で一人称現在形のȣ, Юの位置に付加されているものは語幹に含まれない。つまり，BѢ-Ю/BѢ-TH (正しくはBѢ-ATH), ΓΛΔΓѲΛ-Ю/ΓΛΔΓѲΛ-ΔTH, TBѲP-Ю/TBѲP-HTH) 等。この際，PB-ȣ/PB-ΔTH, ЗP-Ю/ЗP-ѢTH のように母音を含まない語幹の存在や Kȣ-Ю/KѲB-ΔTH のように語幹母音が交替することも許容される。

(2) 現在語幹と不定詞語幹を比較して子音交替が見られる場合に，ゼロ交替 ($C\sim\phi$, $\phi\sim C$) とその他の交替 ($C\sim C'$, $C'\sim C$) が区別される。[6] なぜならば，ゼロ (/$\phi$/) と交替する文字 (すなわち音声) は現在形

または不定詞の語幹に挿入されているだけで，本来の語幹には含まれないと考えられているからである。例えば，現在形にあって不定詞に現れない挿入文字は，ЛЮБЛ-Ю/ЛЮБ-НТИ，СꙋЖД-ꙋ/СꙋД-НТИ，ЖНВ-ꙋ/ЖН-ТИ，ПЛѢВ-ꙋ/ПЛѢВАТИ（ПЛѢТИの誤り）などに見られ，不定詞の挿入文字の例は，ГРЄБ-ꙋ/ГРЄБ-СТИ，СКРЄБ-ꙋ/СКРЄБ-СТИにあるとされる。ところが，交替する文字（literae transmutatae）については，現在語幹か不定詞語幹のいずれか一方に本来の子音が含まれており，他方に変化した子音がある。例えば，ГꙋД-ꙋ/ГꙋС-ТИ，ПЛЄТ-ꙋ/ПЛЄС-ТИ，ВЄЗ-ꙋВЄС-ТИ，МꙋШ-ꙋ/МꙋТ-НТИ，МАЖ-ꙋ/МАЗ-АТИ，НС К-ꙋ/НСК-АТИ. では不定詞語幹に，МОГ-ꙋ/МОШИ，ПЄК-ꙋ/ПЄШИでは現在語幹に真の形式が認められる。

なお，語幹形式の決定にかんするルチカイの記述における問題点の一つは，任意の動詞の形態パラダイムの共通部分としての語幹と形態派生の出発点となる語幹（あるいは語根）の概念が混同されていることである。このことは「語幹」(thema) と「語根」(radix) という二つの用語が同義的に使用されていることに端的に現れている。また，実際に接尾辞 -va-，-a- によって形成される多回動詞の語幹を始元形 (forma primitiva) に求めたり（БЫ-ВАЮ，БИ-ВАЮ，ꙗ-ВЛАꙗЮ，[7] 作為動詞の語幹では語幹母音の交替が考慮され（ВОЗНТИ→ВЄЗ-ꙋ，НОСНТИ→НЄС-ꙋ，Нꙋを含む完了体始発動詞ではこのНꙋが落されているのである（Аꙋ-Нꙋ/Аꙋ-НꙋТИ，Сꙋ-Нꙋ/Сꙋ-НꙋТИ）。

以上の原則が適用できない例外は，ꙗМЬ/ꙗСТИ（ꙗД-），ВѢМ/ВѢСТИ（ВѢД），ИДꙋ/ИТИ（И-），БꙋДꙋ/БЫТИ（БЫ-），ПИꙋ/ПАТИ，ТИꙋ/ТАТИ，ЖИꙋ/ЖАТИ，ПОУИꙋ/ПОУАТИ，ПОЮ/ПѢТИ，ВРЮ/ВРѢТИである。

### 3.2 活用の分類

ルチカイが自分の文法書の中で明らかに独自性を強調しているのが動詞の活用型の分類である。「活用について」(De conjugationibus. Ѡ ИАКЛОНЇАХ

СЛОВ）と題された章には31ページ（§§37-46）が割かれており，これが動詞の説明の大部分を占めている。

先ず，章の冒頭（§37）でラヴレンチィ・ジサニィやメレチィ・スモトリツキの文法書でも採用された二種類の型を提示する方法やドナートゥスや『アデルフォテース』などのラテン語およびギリシャ語の文法書の翻案で無批判に採り入れられている四種類の活用型を拒否する態度を示している。しかし，受動現在分詞と直説法三人称複数現在形にもとづいて三つの活用型を規定したウィーン時代の師ドブロフスキの分類は高く評価している。これに従えば，ЛД-ЄМ/ЛД-ЮТ のように受動現在分詞で語幹に ЄМ が接続され三人称複数形で ЮТ が接続されるのが第一活用となり，ВЄД-ОМ/ВЄДѲТ のように ОМ/ѲТ が接続されるの第二活用，ГОН-НМ/ГОН-ѦТ のように НМ/ѦТ が接続されるのが第三活用となる。この分類は結果として二人称単数現在形の語尾が ЄШИ となるか НШИ となるかによって二つの型を区別する伝統的な（そして現代ロシア語文法においても一般的な）分類法をやや詳しくしたものとなる。すなわち，二人称単数語尾が ЄШИ になるタイプの動詞について，これを語幹末子音が硬子音か非硬子音かによって更に区別しているのである。ただルチカイは，受動現在分詞を形成しない動詞が多いことを理由にドブロフスキの分類も採用せず。結局のところ一人称現在形と不定詞の語尾（terminatio—実際には「終了形式」と訳すべきか）と相関関係にもとづいて六種類の活用を規定した。

表１：活用の型

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第１活用 | -Ю | -ТИ | (БЇ-Ю/БИ-ТИ, ЗНД-Ю/ЗНД-ТИ) |
| 〃２〃 | -Ю | -ДТИ, ѦТИ | (ОР-Ю/ОР-ДТИ, ТРЄБѲ-Ю/ТРЄБОВ-ДТИ; ДЄРЖ-Ѳ/ДЄРЖ-ДТИ, СТО-Ю/СТО-ѦТИ) |
| 〃３〃 | -Ѳ | -ТИ | (НЄС-Ѳ/НЄС-ТИ, ВЄД-Ѳ/ВЄС-ТИ) |
| 〃４〃 | -НѲ | -НѲТИ | (СѲ-НѲ/СѲ-НѲТИ, ГНБ-НѲ/ГНБ-НѲТИ) |
| 〃５〃 | -Ю | -ѢТИ | (ГОР-Ю/ГОР-ѢТИ) |
| 〃６〃 | -Ю | -НТИ | (ТВОР-Ю/ТВОР-НТИ, НѲЖД-Ѳ/НѲД-НТИ) |

## 4. 命令法記述における問題点

### 4.1 命令法三人称の形式

ルチカイは一人称単数以外の全ての人称の命令形を提示しているのであるが，三人称については接続詞 ДА と直説法現在形による複合形式である（表2）。ところが，古スラブ語においては，一人称では双数および複数に，二人称では全ての数に，そして三人称では単数のみに単一形が認められており，これらの単一形のみで命令形の形式を記述するのが現在は一般的である（表3）。また，ロシア教会スラブ語の規範書でも単一形式のみを提示するのが原則であり，先に示した複合形式は「願望法（желательное наклонение）」としたり［文献1：§92］，目的や願望の表現として［文献12：97］命令法から除外する傾向にある。ただし，三人称単数形を認める場合（［文献1］—表4）と除外する場合（［文献12］—表5）とがある。

表2：ルチカイ

| | 単　数 | 複　数 | 双　数 |
|---|---|---|---|
| 1 | — | NЄCЪM | — |
| 2 | NЄCH | NЄCЪTЄ | — |
| 3 | ДА NЄCЄT | ДА NЄCȣT | — |

表3：古スラブ語

| | 単　数 | 複　数 | 双　数 |
|---|---|---|---|
| 1 | — | NЄCЪMЪ | NЄCЪBѢ |
| 2 | NЄCH | NЄCЪTЄ | NЄCЪTA |
| 3 | NЄCH | — | — |

表4：ロシア教会スラブ語(1)

| | 単　数 | 複　数 | 双　数 |
|---|---|---|---|
| 1 | — | ЙДЄMЪ | ЙДЄBA/BѢ |
| 2 | ЙДИ | ЙДИTЄ | ЙДИTA/TѢ |
| 3 | ЙДИ | — | — |

表5：ロシア教会スラブ語(2)

| | 単　数 | 複　数 | 双　数 |
|---|---|---|---|
| 1 | — | ЙДЄMЪ | ЙДЄBA/BѢ |
| 2 | ЙДИ | ЙДИTЄ | ЙДИTA/TѢ |
| 3 | — | — | — |

しかし，ルチカイは「活用にかんする注記」（§47 Observationes relate ad conjugationis）の中で命令法三人称単数が二人称単数と同じ形であることを認めているのである。いわく，「三人称単数は二人称と違ったところがなく，三人称複数も同じように複数二人称と違わない。（中略）しかし，文献には三人称単数と複数を ДА によって表している痕跡があるので，わたしは多くの曖昧さを取り除くためにこの助辞を残したのである[8]」。また，ルチ

カイは接続詞 ДА と直説法現在形による複合形式をやはり「注記」の中で「願望法と接続法（optativus et conjunctivus)」の正統な形として例示している。[9]「願望法」と「接続法」が同一視されていることについては第4節で詳しく検討することにして，ルチカイの言う「願望法」または「接続法」が［文献1］で言うところの「願望法」と同じ法範疇を指していることには疑問の余地がない。

このように二種類の法の形式が混在する現象はウジェヴィチにも見られる。すなわち，三人称の単数と複数を複合形(ДА ГЛАГОЛЕТЬ, ДА ГЛАГОЛЮТЬ)としただけでなく，二人称単数および一人称複数と二人称複数については単一形と複合形を併記している("ГЛАГОЛИ vel ДА ГЛАГОЛЕШИ", "ГЛАГОЛѢМЪ vel ДА ГЛАГОЛЕМ", "ГЛАГОѢТЕ vel ДА ГЛАГОЛЕТЕ")。ウジェヴィチはこの複合形を願望法現在時制の形式と見なしており，混在の度合は三人称にのみ複合形を流用したルチカイの場合よりも甚だしいのである。

ところで，古スラブ語の命令法はその原典であるギリシャ語新約聖書に現れる命令法と接続法に対応していることが多い。二つの法とのおおよその対応関係は人称に依存している。すなわち，二人称単数形はギリシャ語原典でも命令法二人称単数であり，二人称複数と二人称双数は命令法二人称複数に対応する。しかし，ギリシャ語には命令法一人称複数形がなく，古スラブ語の命令法がギリシャ語の接続法に対応している。そして，三人称については命令法単数形においてのみ両言語間に一致が見られ，複数形はギリシャ語の命令法がДА による複合形が対応する。もっとも，一致する三人称単数形は新約聖書テキストに限定すればБѢДИ（*ἔστω, γενεθήτω*）のみであって他のギリシャ語の命令形には主として複合形が当てられている。つまり，古スラブ語テキストにおいても本来の命令法三人称単数が現れるのは特殊な場合に限られており，複合形で代用することのほうが一般的なのであった。

古スラブ語を継承したロシア教会スラブ語においても上の事情に実質的な変化はないのであるが，16世紀末以降，教会スラブ語の本格的な文法書が編

纂されるようになって，これらの文法書における命令法の記述が複雑化する。例えば，ラヴレンチィ・ジザニィは命令法（повелите'ный образъ）を単・双・複の三数について二人称と三人称の形を認め，二人称は単一形（[命令法現在]：**СПАСАЙ**，**СПАСАЙТА**，**СПАСАЙТЕ**．[命令法未来]：**СПАСН**，**СПАСНТА**，**СПАСНТЕ**）とし，三人称には複合形（[命令法現在]：**ДА СПАСАЕТЪ**，**СПАСАЕТА**，**СПАСАЮТЪ**，[命令法未来]：**ДА СПАСАЕТЪ**，**СПАСАЕТА**，**СПАСОУТЪ**）を示したが，これらの複合形はそれぞれ願望法（желател'ный образъ）の現在時制と未来時制からの「借りもの」であった［資料２］。次に，メレチィ・スモトリツキは命令法（наклонение повелителное）に一人称単数以外の全ての数・人称を提示しており（表６），三人称はいずれも複合形である。スモトリツキも命令法以外に祈願法（наклонение молитл'ное）を設定している（表７）が，これは三人称単数と二人称単数が共に単一形であるという点を除いて命令法と同じ形式が与えられている。そして，スモトリツキの場合，「**ДА**＋直接法現在」は接続法（наклонение цодчинител'ное）に固有の形式である。

**表６：スモトリツキの命令法**

| | 単　数 | 複　数 | 双　数 |
|---|---|---|---|
| 1 | — | **УТЪМ** | **УТЪВА** |
| 2 | **УТН ТЫ** | **УТЕТЕ** | **УТЪТА** |
| 3 | **ДА УТЕТ ОНЪ** | **ДА УТȣТ'** | **ДА УТЕТА** |

**表７：スモトリツキの祈願法**

| | 単　数 | 複　数 | 双　数 |
|---|---|---|---|
| 1 | — | **УТЪМ** | **УТЪВА** |
| 2 | **УТН ТЫ** | **УТЕТЕ** | **УТЪТА** |
| 3 | **УТН ОНЪ** | **ДА УТȣТ'** | **ДА УТЕТА** |

結局，ルチカイの提示した命令法のパラダイムはスモトリツキの記述とほとんど一致している。このことについては，スモトリツキの文法書がムカチェヴォ司教区を含むカルパチア山脈西南部の図書館に収蔵されており，この文

法書がこの地域での18世紀後半に始まる文法観形成に大きな影響力を持っていたというP.M. リザネチ［文献5：16］の主張を受け入れるならば，確かにルチカイはスモトリツキの文法記述を継承したと考えてもよさそうである。しかし，命令法，祈願法，接続法をそれぞれ独立した法と見なしていたスモトリツキと違い，ルチカイにおいては願望法と接続法（および仮定法）の区別がない。つまり，法の形態システム全体における命令法の位置付けが二人の文法書で相違しているのである。

なお，ルチカイが三人称単数と二人称単数が本来単一形で全く同じ語形であることを認めながら，変化表においては複合形を掲示したのには，上述のスモトリツキの影響以外にも理由が考えられる。彼は教会スラブ語に対応するルシン語の命令法三人称単数（単一形）の例として“дай ти боже розума”という文章をあげ，これに“det tibi Deus rationem”とラテン語訳を付け，これが「論理の法則に反している」と述べているのである。[10] ラテン語訳自体は「あなたに神が分別を与えますように」という意味の論理的に矛盾のない接続法の文章であるが，ルシン語の方は「神」が呼格形の‘боже’になっていることから，「神よあなたに（神が）分別をあたえますように」という非論理的な文章となってしまう。おそらく，現実の教会スラブ語テキストに単一形の命令法三人称単数がほとんど見られないことから，ルチカイ自身もこの形式の有効性に確信が持てなかったのではないかと思われる。

### 4.2 語尾形式

前節で示したようにルチカイの提示した命令法の語尾形式は二人称単数が-Н，一人称複数が-ѢМ，二人称複数が-ѢТЄである（表2）。これらは古スラブ語の語尾形式と基本的に一致しているとみなすことができる（表3）。しかし，これは部分的な一致であって，古スラブ語では動詞の現在語幹が硬子音以外の子音で終る場合には，一人称および二人称の複数でも語尾形式が

-НМЪ, -НТЄ となるのに対し，ルチカイでは一貫して -Ѣ -で始まる語尾が示されている。例えば，古スラブ語 ТВОРН［2単］，ТВОРНМЪ［1複］，ТВОРНТЄ ［2複］に対して，ルチカイではТВОРН［2単］，ТВОРѢМ［1複］，ТВОРѢТЄ［2複］が規範形となっている。つまり，語幹が子音で終われば常に -Н，-ѢМ，-ЄТЄ となるのである。ただし，語幹が母音で終る動詞については -Й，-НМ，-НТЄ（БЇЙ，БЇНМ，БЇЙТЄ；РАЗѮМѢЙ，РАЗѮМѢНМ，РАЗѮМѢЙТЄ 等）という原則として古スラブ語と同じ語尾形式である。

現在語幹が子音で終る動詞の命令法語尾形式について，ルチカイはこう述べている。「複数の一および二人称の Ѣ は多くの人々がポーランド語の影響であるとみなしており，このため（これを）排除しようとして，書物では Ѣ の代わりに Н でことごとく埋めてしまった。すなわち，ГЛАГОЛНМ，ГЛАГОЛНТЄ，ТВОРНТЄ と。ルテニア語ではポーランド人との交通を全く持ったことのない地域でさえも Ѣ がそのまま保たれている[11]」(115)。この記述からカルパチア山脈西南部で使用されていた教会スラブ語テキストでは -НМ，-НТЄ の語尾形式が一般的であったことが伺える。また，17世紀中期に成立した現行のロシア教会スラブ語規範を見る限り二人称複数の語尾は -НТЄ に統一され，一人称複数の直説法の語形で代用され，場合によってアクセントの位置を区別することになっている（硬子音語幹の例は表4と表5参照，硬子音以外の子音語幹：ЛЮБѢ̀，ЛЮ́БНМЪ，ЛЮБѢ́ТЄ）。従って，ルチカイは自らの文法書の中に意図的に -ѢМ，-ѢТЄ を定着させようとしていることがわかる。

一人称および二人称複数の語尾の先頭母音 -Ѣ- がなぜ「ポーランド語の影響（Polonismus）」と見なされていた理由についてはわからない。なぜならば，ポーランド語の命令法はすでに16世紀末には語幹に接続される母音要素がなくなる傾向にあり，母音要素が現われる場合でも -i- に限られているのである[文献2：250]。ジザニィの文法書は命令法に一人称を認めないので

あるが，二人称語尾の母音要素は子音語幹動詞の場合，常に -Н- である（硬子音語幹：СПАСИ, СПАСИТЄ，非硬子音語幹：ВЪЗГЛАСИ, ВЪЗГЛАСИТЄ）。一方，スモトリツキは硬子音語幹動詞には УТИ, УТѢМЪ, УТЄТЄ と複数（および双数）に -Ѣ- で始まる語尾を示し，硬子音以外の子音語幹を持つ動詞は ТВОРИ, ТВОРИМЪ, ТВОРИТЄ と常に -И- で始まっている。つまり，古スラブ語の言語規範に忠実なのである。しかし，子音語幹動詞に二種類の語尾が接続されることが記述されているのは1619年にエヴィエで出版された文法書［資料４］であり，1638年の簡略版［資料５］には硬子音語幹動詞の命令法しか提示されていない。そして，硬子音以外の子音語幹の例である ТВОРИТИ については直接法の各時制の人称変化の一覧が示されたあとに，「他の全ての法も時制と人称においては УТЎ におけるのと同じく直接法によって説明されている」[12] と記されただけで，変化表が省略されている。従って，ルチカイが命令法にかんする記述を行う際に，もしスモトリツキの文法書に依拠したのであれば，1619年版ではなく1638年版を参照した可能性が強い。

また，「文字について」（De literis. О БОУКАХ—§§１-３）の章で明らかになるのであるが，ルチカイにとってѢとИは極めて似通った音価を持った文字である。すなわち，Иがラテン文字 ‘i’ で転写されるのにたいし，ルテニア人はѢをロシア人のように ‘je’ と発音せずに，「アクセント付の í あるいはドイツ語の wie」と発音するというのである。[13] つまり，ルチカイにとって命令法複数の語尾は -ИМ, ИТЄ であっても，-ѢМ, ѢТЄ であっても実質的な音価に違いがなく，むしろ彼にとって馴染みのない語尾を示したスモトリツキの記述の方が正当に思えて硬子音語幹に接続する語尾形式を他の子音語幹の動詞にも一般化してしまったのかもしれない。[14]

## 5. 接 続 法

すでに述べたように，ルチカイの提示した動詞命令法の人称形のうち，三

人称（単数・複数）は願望法（あるいは接続法）であった。この法の変化表はルチカイによって時制形の形成を助ける動詞として位置付けられたЄСМЬ（БЫТИ）と第一活用動詞БИТИの説明の中に「接続法」（Conjunctivus）というタイトルで含まれている（表8および表9）。そして第二～第六活用および不規則動詞については，第一活用の変化表によって作ることができるので「故意に除外した」と述べている。[15]

表8：接続法現在

| | 単　数 | 複　数 |
|---|---|---|
| 1 | ДА БЇѦ | ДА БЇЄМ |
| 2 | ДА БЇЄШИ | ДА БЇЄТ |
| 3 | ДА БЇЄТ | ДА БЇѦТ |

表9：接続法過去

| | 単　数 | 複　数 |
|---|---|---|
| 1 | БИЛ БЪІМ/БЪІХ | БИЛИ БЪІХОМ |
| 2 | БИЛ БЪІСТЬ | БИЛИ БЪІСТЄ |
| 3 | БИЛ БЪІ | БИЛИ БЪІША |

例が示すように，接続法現在時制はДАと直説法現在形による複合形であり，過去時制は古スラブ語の仮定法の流れを汲んだものである。[16] ただし，ルチカイの例示した二人称単数“БИЛ БЪІСТЬ”は東スラブの教会スラブ語の規範からは逸脱していると思われる。例えば，ジザニイに従えば“ДА БИЛЪ БЪІ ЄСИ”（願望法），スモトリツキに従えば“ДА БИЛЪ БЪІЛЪ ЄСИ”（接続法）または“БИЛЪ БЪІ ЄСИ”（仮定法）となる。ルチカイは動詞の過去時制二人称単数形のみが“БЪІЛЪ ЄСИ”または“БЪІ ЄСИ”のように複合形になるという16世紀にはロシア教会スラブ語で一般化していた現象を規範的でないものと考えていた[17]のでБЪІСТЬを使用したと思われる。

また，ジザニィの願望法は全ての時制でДАを伴っており，スモトリツキでは接続法がДА，仮定法がАЩЄによって導かれているのに対して，ルチカイの接続法過去時制はいずれも除外されている。この理由を彼は次のように

述べている。「ѧѱє を前に置くのは過剰なことである。なぜならばこれが接続法を作り出しているのではなく，導いているからであって，ѧѱє なしで接続法は形成されるし，有効なのである。例えば ѧѧѧ БЪІМ ѻУБѻ は接続法であり，ѧѱє は前置されていない[18]」。この見解はある意味で正しい。すなわち，現在時制は直説法の人称形によって作られているので ѧѧ が存在することが接続法の形態標識となるのだが，過去時制は БІѧ 等の能動過去分詞と БЪІТІ の過去形（アオリスト形）の組合せ自体がすでにユニークなものであるので法を識別する要素を必要としないのである[19]。また，接続詞 ѧѧ で導かれる従属節に含まれる動詞は現在または未来の意味を持った直説法現在形であるか，上述の仮定法結合のみであるので，ジザニィやスモトリツキのような煩雑な動詞パラダイムを提示せずに，二つの時制の変化表のみに簡素化したことは現実的な判断であったと言うことができる。

ただし，ルチカイの理解では接続法は直説法とも不定法とも形式的に区別できる第三の下位範疇でしかなく，接続法と願望法あるいは仮定法を区別しようという意志はなかったものと思われる。文法書の本文中に二度 “Ѻ ЄЖЄ СПѻДѻБІТІСѦ ІѦМ”（「われらが報いに与りますように」）という文が接続法の例として引用されているが（85, 116），これは “ѻ” が「接続法を完成する」と考えたからである。しかし，これはおそらく間投詞に過ぎず，実際には “ЄЖЄ” が “ѧѧ” と同じ機能を持つ接続詞であるので[20]，接続法の文となっているのである。

## 6. 結論に代えて

教会スラブ語動詞の命令法および接続法の記述に際してルチカイが従った原則は以下の二点に集約される。

1．それぞれの法には互いを区別する形態上の特徴がある。

2．例示する規範形には現行の教会スラブ語からではなく，古スラブ語の

形式を採用する。

これらは19世紀後半から次々と現われることになる本格的な古スラブ語の規範書における記述原則と基本的に通じるものであり，これによってルチカイの『スラブ語・ルシン語文法』は特に法の記述にかんして必要以上に複雑化したメレチィ・スモトリツキの文法書に代表される前時代の規範書と一線を画することになる。しかしながら，規範的な語形の決定と語形と文法範疇との関係付けにおいて，著者独自の誤った判断が見られることも事実である。そして，その主要な原因は19世紀後半のスラブ語学者と違って，ルチカイが古教会スラブ語と後世の教会スラブ語との違いを充分に認識していなかったことにあると思われる。彼が依拠できたおそらく唯一の古いスラブ語の文献が1581年に出版された『オストローグ聖書』であった可能性が強いのである。

## 注　釈

（1）“Grammatica Slavo-Ruthena, seu Vetero-Slavicae, et actu in montibus Carpathicis Parvo-Russicae, ceu dialecti vigentis linguae.”

（2）現在のウクライナ共和国西南部（ザカルパト州—州都ウジゴロド）。ムカチェヴォの東スラブ系住民は本来ギリシャ正教の信者であった。しかし，この地区は17世紀初頭に1596年のブレスト合同の結果成立したギリシャ正教の儀式を保持しながらローマ教皇の首長権を認める帰一教会の布教を受け入れた。そして，1771年に教皇庁より正式な司教区として認可され，オーストリア皇帝からも庇護を受けることになった。なお，この地域の教会の歴史については［文献11］を参照。

（3）*Ukr.* “реальна гімназія”—学習科目として自然科学や数学を重視し，古典語（ギリシャ語・ラテン語）ではなくドイツ語やフランス語を語学科目とする中等学校。

（4）「ルシン語」（*Ukr.* русинська мова）という名称は近代になってから一般化したものである。ルチカイ本人はラテン語で lingua（または dialectus）Ruthenica，スラブ語で **карпато-рꙋскаѧ** と呼んでいる。русин は本来「Русь の人」という意味で，東スラブ人の一般的な呼称であり，Русь から派生する形容詞であるрус(ь)ский，рус(ь)кий も東スラブに関わるもの全般に使用されていたのである。

（5）ルチカイの「未完了過去」（imperfectum）は，古スラブ語および教会スラブ

語文法で今日呼び慣わされているアオリストと未完了過去のいずれでもあり得る。『文法』で例示されたКРЪІ, РЪІ, ЗНА はアオリスト形であり，余計な音が付加された例として挙げられたПОУА-Т, ПОѦ-Т, НЄС-Є, ВЄД-Є, ВЄЗ-Є はアオリスト形，СЛЪІША-ШЄ, СТОѦ-ШЄ は本来の未完了過去形である。このように現在では形式的に区別されている単一過去形を「未完了過去」という名称のもとで一括してしまったのがルチカイの『文法』の一つの特徴なのである。なお，この二形式の混同については岡本が2000年８月27日に［文献８］と同名の題目で口頭発表を行った。

（６）“Si in praesenti aliae Literae, quam in infinito occurrant, distinquendae [sic!] erunt Literae epentheticae, a Literis transmutatis”「現在形に不定詞とは違った文字がある場合に，挿入文字と交替文字は区別すべきである」

（７）原文では ꙗ の後にハイフンがあって改行されている。ルチカイの語幹決定の原則に従えば ꙗВЛѦЮ/ꙗВЛѦТИ は ꙗВЛЮ/ꙗВИТИ に立ち戻らなければならず，現在形の Л は不定詞には現れない挿入文字であるので，ꙗВ-が始元形ということになる。

（８）“Tertia Sing. non est distincta a 2-a sicut nec pluralis 3-a. a plurali 2-a (...) Sed quoniam adsint in codicibus vestigia tertiam sing. et pluralem per ДА exprimendi, ad tollendas multas ambiguitates particulam hanc retinui (116)”

（９）“In Slavica recte suppletur Praesens per ДА(:) ДА БꙋДꙋ, ДА БꙋДЄШИ, ДА БꙋДЄТ.”「スラブ語では現在形が ДА によって補完されるのが正しい（例は省略）」

（10）“Id ipsum in Ruthenica in multis casibus observare est: ДАЍ ТИ БОЖЄ РОЖЄ РОЗꙋМА nihil aliud est, quam, det tibi Deus rationem, name det tibi Deus rationem contra leges logicas est.”

（11）“In 1-a et 2-a plurali Ѣ multi existimabant esse Polonismum, et ideo eliminandum adgressi, repleverun libros per И, in locum Ѣ, ГЛАГОЛИМ, ГЛАГОЛИТЄ, ТВОРИТЄ. In Ruthenica Ѣ mansit intactum in illis etiam partibus, quae cum Polonis nullam habuerun conversationem.”

（12）“Такожде и всѣ прочїи Наклонения, ѡт изявителнагѡ начертаваютъся, яко же и въ чту, въ Временах и Лицяхъ.”

（13）“Russi proferunt velut je. (...) Rutheni, huc inclussis Galliciae, et parvae Rusiae Incolis velut accentuatumí, seu Germanicum wie.（４）

（14）文字 Ѣ は東スラブ語地域で，かなり早い時代に［je］または［i］と発音されるようになっていたので，Є や И と誤記されることも稀ではないのだが，ѣと綴られた箇所は語源的に正しいことが多く［文献９：39-40］，書き手にとって特に意識された文字であったようである。ルチカイが命令法複数の語尾として敢えて-ѢМ,

-ѢТЄを一般化したのもこうした語源に忠実でありたいという意識が働いたとも考えられる。

(15) "...Conjunctivum, sponte exmisi, nam hae flexiones secundum Paradigma БЇѦ facile adornari possunt." (91)

(16) キリル文字で書かれた古スラブ語テキストでは，条件法固有の "БНМЬ, БН...." が早い時期に БЫТИ のアオリスト形と融合してしまう傾向にある［文献 4 : 280］。

(17) これについては［文献 8］で詳しく述べられている。

(18) "ѦЩЄ superfluum est praeponerre, nam illud non efficit, sed regit Conjunctivum qui absque ѦЩЄ formari poterit, actuque existit: ДѦЛ БЫМ ѲУБѦ est Conjunctivus et ѦЩЄ non praeponitur." (116)

(19) ただし，ルチカイは直説法大過去の例として БЫХ. БѢ, БЫШѦ. БНѦН という複合形を提示している。これらのうち一人称単数のБЫХ と三人称複数 БЫШѦ は接続法過去と同じであるので実際には形式上曖昧である。なお，ルチカイの言う大過去時制は二・三人称単数の БѢ と能動過去分詞の組合せを除いて間違っている。古スラブ語およびロシア教会スラブ語の二つの単一過去形（アオリスト・未完了過去）にかんするルチカイの理解については［文献 8］で述べられている。

(20) 「接続詞（Conjunctiones. СОЮЗЫ-СОКЛЮЧЄНїѦ）」の項（§52）でルチカイは "ЄЖЄ" をあげていない。ДѦ と同じく接続法を導くものとしてはѦ, Ѳ, ѲЖЄ を例示している。

## 資　料


［1］（Иван Ужевич,）*Граматика слов'янська І. Ужевича*. Київ. 1970.

［2］Horbatsch Olexa (hg.), *Lavrentij Zizanij, Hrammatika Slovenska. Wilna. 1596.* Frankfurt a. M. 1980.

［3］Михайло Лучкай, *Граматика слов'яно-руська* (=*Grammatica Slavo-Ruthena: seu Vetero-Slavicae, et actu in montibus Carpathicis parvo-Russicae, ceu dialecti vigentis linguae edita per Michaelem Lutskay...Budae. 1830.*). Київ. 1989.

［4］Мелетий Смотрицкий, *Граматика* Київ. 1979.

［5］Horbatsch Olexa (hg.), *Hrammatiki ili pismennica jazyka sloven'-skaho. Kremjaneć 1638: Eine gekürzte Fassung der kirchenslavischen Grammatik von Meletij Smotryćkyj*. Frankfurt am Main. 1977.


## 文　献


［1］Іеромонахъ Алѵпій (Гамановичъ), *Грамматика церковно-славянскаго языка*. Москва. 1991.

［2］Ананьева, Н. Е., *История и диалектология польского языка*. Москва.

1994.
[ 3 ] Брик, Іван, "Йосиф Добровський і українські граматики" *Josef. Dobrovský 1753-1829. Sborník statí k stému uýročí smrti Josefa Dobrovského,* pp. 23-43. Praha. 1929.
[ 4 ] Diels, Paul, *Altkirchenslavische Grammatik.* 2. Aufl. Heidelberg. 1963.
[ 5 ] Лизанець П. М., "Михайло Лучкай і його граматика". [資料 3 : 5-33]
[ 6 ] Ляпунов, Б., "Добровский и восточно-славянские языки". *Josef Dobrovský 1753-1829. Sborník statí k stému výročí smrti Josefa Dobrovského,* pp. 114-137. Praha. 1929.
[ 7 ] Magosci, Paul Robert (ed.), *A New Slavic Language Is Born: The Rusyn Literary Language of Slovakia.* New York. 1996.
[ 8 ] Окамото Такао, "Морфологические нормы церковнославянских глаголов прошедшего времени в 《Грамматике Славено-Русинской》 Михайла Лучкая (1835)". スラヴ学論叢（北海道大学文学部ロシア語ロシア文学研究室年報）5．2000.（掲載予定）
[ 9 ] 岡本崇男，「『バルクラボウ年代記』における表記の規範意識について」。神戸外大論叢48—3，pp. 21-51. 1997.
[10] ———，「16—17世紀南西ルシ文章語における動詞過去形の規範について」。神戸外大論叢50—3，pp. 43-63. 1999.
[11] ———，「『バルクラボウ年代記』における動詞過去形の人称表示について」。古代ロシア研究　20, pp.53-62. 2000.
[12] Pekar, Athanasius B., *The History of the Church in Carpathian Rus'.* New York. 1992.
[13] Плетнева, А. А. и А. Г. Кравецкий, *Церковно-славянский язык.* Москва. 1996.
[14] Востоков, А.А., *Грамматика церковно-словенскаго языка, изложенная по древнѣйшимъ онаго письменнымъ памятникамъ.* СПб. 1863. (Леипзиг. 1980)